

3月	血石又は水緑柱石	血滴石
4月	ダイヤモンド	ダイヤモンド
5月	エメラルド	エメラルド
6月	真珠又は月長石	めのう
7月	ルビー	ルビー
8月	紅縞瑪瑙又は橄欖石	サードオニックス
9月	サファイヤ	サファイヤ
10月	蛋白石又は電気石	オパール
11月	黄 玉	トパーズ
12月	土耳其石又は青金石	トルコ石

誕生石を身につけていると悪を除き幸福をもたらすと云われている。勿論科学的な根拠があることではないからいうなれば迷信の類であろう。私は日頃迷信や方位、星まわりなどにとらわれない人間であると自負しているのだが、それにもかかわらずブラッドストーンに執着するのはやはり人間的な弱さに起因するのであろうか。とまれかくまれこの石のもつ聰明・沈着・勇敢の3つの徳目が、指輪と同様つねに我身にそなわっていてほしいものである。

教育というもののもつ力

別 技 篤 彦

松井先生の御退官にさいし、永年の御研究と教育上の御努力に深い敬意をささげるとともに一言所感をのべさせていただきたい。

人間がどういう道を生涯のコースとしてえらぶかはもとよりその人の資質や意志が最終的な決定条件であるが、それを刺戟し育成するための教育はより一層重要なものと思われる。しばしば個人的な師の影響も含めて幼いときどんな教育をうけたかがその人の人間形成に与える結果は決して過少評価されてはなるまい。こういふことを思うのも実は私は松井先生と同じ東京府立五中（今の小石川高校）の出身であり、先生は私の1年先輩に当たるからである。そして何かふしぎなことには五中からはたくさんの地理学者が出ていることである。飯塚浩二さん（故人）を手はじめとして松井先生、吉村信吉（故人）、室賀信夫、川上健三、田辺健一、清水馨八郎、斉藤光格、風巻義孝の諸

教授および小生などである。他の科学分野の研究者に比べて少ない地理学者の中ではこれは決してわずかな割合とはいえないと思う。私はその理由について時々考えることがある。

五中の創立は大正8年(1919年)であり、初代校長は有名な伊藤長七先生であった。先生は一中、三中、四中など既成の学校に対して新しい教育の理想をここで実現すべく渾身の努力を尽された。セビロにネクタイという型破りの制服や、女性の教諭の採用などは当時の世間をおどろかせたが、しかしもっと重大なことはそうした表面的なことではなく、若いわれわれの生きる態度として“立志・開拓・創作”の三つのモットーを徹底的にたたきこんだことであった。何かをしようとする目的をしっかりとつこと——これが“立志”であり、そのためにあらゆる困難をのりこえていくこと——これが“開拓”であり、さらにそうしたものの上に他人の借りものでない自分自身のものをつくりあげること——これが“創作”である。この三つの精神はまさに研究者を育てるのに不可欠のエスプリである。いわゆる当時的大臣、大将をめざした他のエリート校に比べ、新設の五中の出身者が大きく学界に活躍するに至った根本原因はここにあったのであろう。卒業生名簿をみても本当に研究者の多いことにおどろかされる。当時の校友会雑誌をみてもこれが中学生の仕事かと思われるようになりっぱなものがたくさんあった。吉村信吉さんなどはその頃から洗足池の研究ととりくんでいた。松井先生もおそらくこういう雰囲気の中かで科学者としての精神をしっかりと身につけられたものと私は信じている。そして卒業者の中に地理学者が多いというのも、換言すれば他部の研究者がさらに一層多いということなのである。三沢勝衛氏の感化で諏訪中学から多くの研究者が生れたことは有名な事実であるが、五中におけるわれわれの経験からも教育というものの持つ力の強さ(同時にある意味ではおそろしさ)を今さらのように感じるのである。伊藤先生は惜しくも早く亡くなられたがその残された教えが長く校風として育ったわけであり、ことに直接その教えにあづかったわれわれの年代のものは一層幸福な思いに浸ることができる。

A. Hettner 先生に憶う

岸 本 実

この間、お茶の水女子大学へうかがったとき、松井先生が大学院の講義で、A. Hettner 先生の著書 *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden* をつかわれておられることを耳にし、本当に嬉しいことだし、本当に結構なことだと感じた。